

よみがえる浦島伝説

坂田千鶴子著

浦島太郎といえば、だれもが知っている。イジメられていたところを助けだしたカメに連れられて竜宮城に行った漁師。宴会に飽きて結局故郷に帰ってしまい、その際「ぜったい開けてはいけない」玉手箱を開けるやいなやおじいさんになってしまった男。

だれでも知っている伝説なのに、その起源をさかのぼってみると、びっくりするような操作があった…というのによくある展開だが、浦島伝説ほど驚天動地なものはないだろう。

いわく、浦島伝説が女の恋を尊ぶ文化から描かれていた、浦島は乙姫の恋人だった、そして玉手箱に入っていたのは姫自身だった、なんてハナシ、あなた知っています？

なぜ、こんなに違ってしまったのだウラシマ？ 筆者は、そのなぞをスリリングに解き明かす。伝説変容の陰には、男性による女性観の押しつけや、「男と女はかくあるべき」という政治的意図による書き換えが

物語変容のなぞ解明

あったというのだ。すぐれて実証的ななぞ解きは、目からウロコというか、わくわくするような推理小説のなぞ解きに似た快感をもたらす。世界観をひっくりかえすような衝撃的読書体験が味わえる一冊である。

国文学を専攻する著者は、浦島伝説をフェミニズム批評の立場から検証しつつ、伝説に描かれた乙姫とは何者か、竜宮城とはいったいどこにあったかという古代地政学的な考察まで手抜きなく行っていて、それも読みごたえがあるのだが、さらに興味深いのは大学の教室で、生徒たちにくだんの講義をしたあと、「では、キミたちの浦島の伝説を描いてごらん下さい」と言って絵本創作をさせていることだろう。

本書にはその成果も収録されている。現代のウラシマ君、いや若人たちの恋愛観とライフスタイルが躍動感あふれるかたちで展開されている。本当によみがえってしまったのだウラシマ。こんなに楽しい授業なら、わたしも受けてみたいものだ！



|| 小谷真理・評論家 ||
(新曜社・二、〇〇〇円)

